

2025 年度大学院入試
後期日程（一般入試）

出題意図

本問題は、受験生の研究計画書から適切なキーワードを抽出し、それを基に作問している。

本設問は、受験者がインクルーシブ社会におけるデザインの役割を理解し、具体的な生活行為を題材として QOL 向上にどのように貢献できるかを論じる力を評価するものである。特に、障がいを持つ人々の体験をユーザーエクスペリエンス（UX）の視点から捉え直し、創造的なデザインにより改善・発展させるための着眼点を導き出せるかを重視する。

また、単なる機能的な解決策の提示にとどまらず、社会的・精神的側面を含めた多面的な思考を展開できるか、さらにはペルソナの設定などを通じて論述に説得力を持たせられるかを確認する。これにより、修士課程での研究に必要な論理性、独創性、社会的視野を兼ね備えているかを判断することを目的とする。

解答例（回答者の独自のアイデアがあるとよい。ペルソナを設定した場合）

ペルソナは、ロービジョンで初老の一人暮らしの女性である。彼女にとって植物を育てる行為は、暮らしに潤いを与え、孤独を和らげる大切な営みである。

もし、鉢に植物の育成状態のモニタリングと環境の状態をリアルタイムで監視する能力を与えるとどんな物語が発想できるだろうか。鉢が、植物の気分を予測し、「小さなつぶやき」として伝えてくれたらどうだろう。水が欲しいときには「のどがかわいたよ」とささやき、日差しが強すぎるときには「ちょっと日陰がほしい」と呟く。彼女はその声に耳を傾けながら、まるで友人と対話するように植物と関わることができる。

さらに、植物の成長に合わせて鉢がほのかに発光する仕組みも想像できる。朝にはやわらかな色の光で一日の始まりを告げ、夜には静かな光で休息を促す。弱まった視覚であっても色の変化や光の気配は感じ取ることができるため、彼女はその光を通じて植物のリズムを生活の中に重ね合わせることができる。

植物と鉢は暮らしの中ではひとつに結びついており、一日の光合成や水の記憶を抱えた存在として、夕刻になるとその記憶をかすかな「揺らぎ」を通して表出する。彼女が食卓につき、近隣の人や友人と夕飯を共にするとき、その小さな動きは会話の糸口となり、「今日はたくさん光を浴びて元気そうね」「水をあげたから落ち着いたみたいだね」と自然に言葉が交わされる。植物はその日の光と水を物語に変え、人と人とをやわらかにつなげていく。

UX の視点から見れば、このデザインは「寄り添う楽しさ」「ささやきに耳を澄ます喜び」「共に暮らすぬくもり」といった新しい価値をもたらす。結果として、植物はただの鑑賞対象ではなく、生活のリズムをともに奏でるパートナーとなり、彼女の精神的 QOL を豊かに支えてゆく。